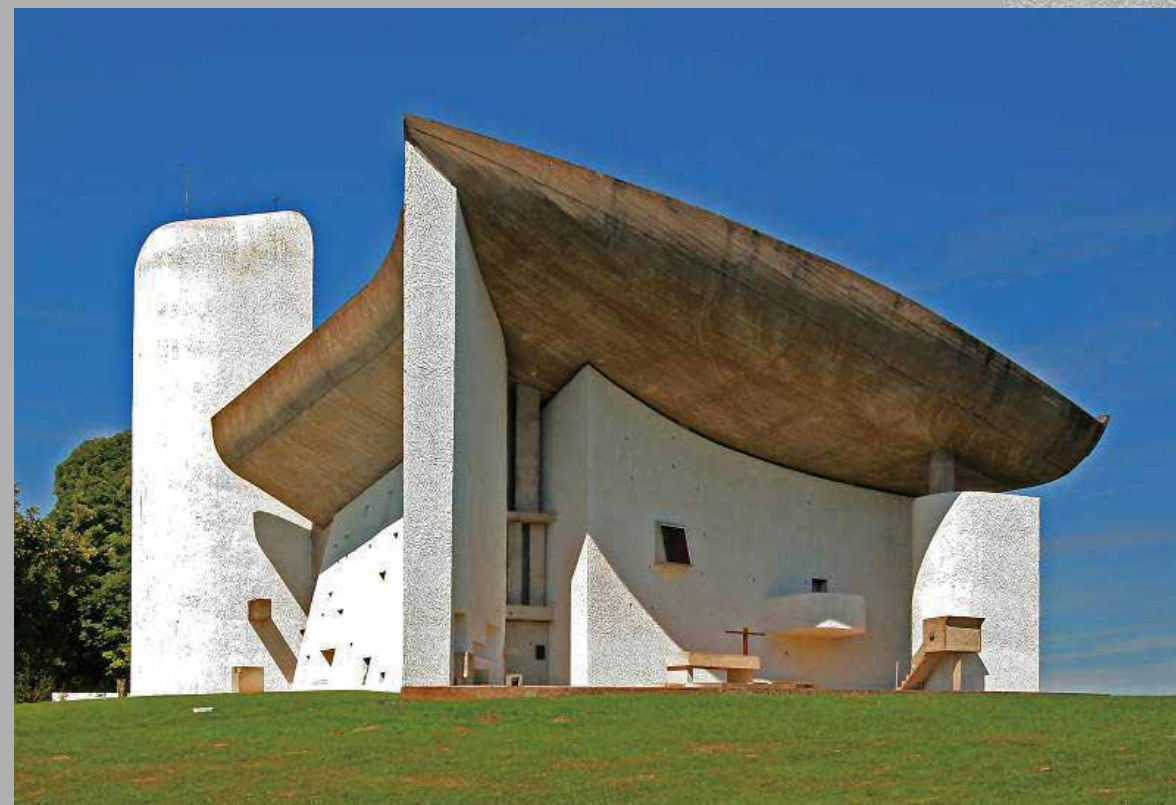
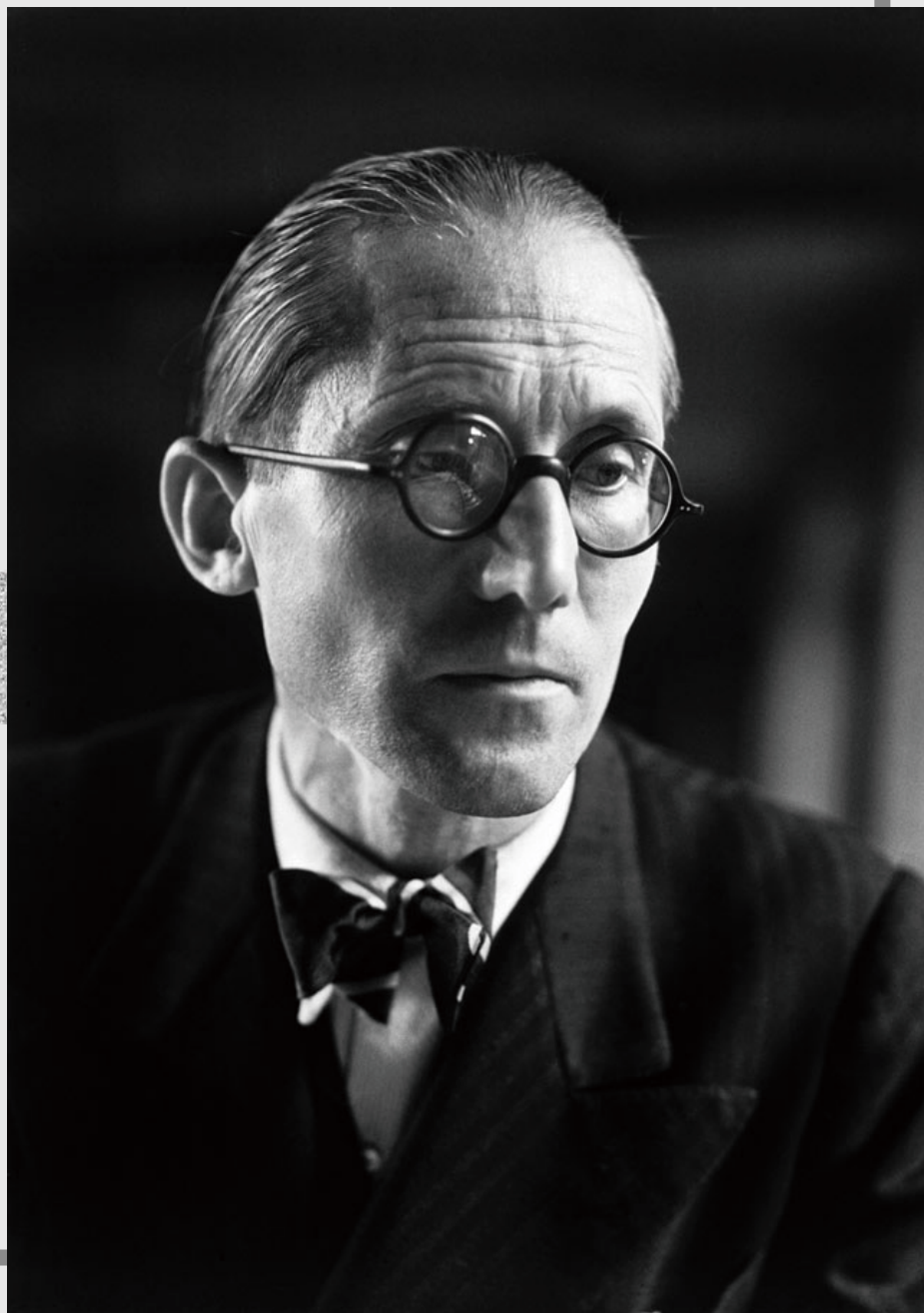




Le Corbusier

ル・コルビュジェの建築写真集





ル・コルビュジエはスイスで生まれる。フランスで主に活躍した建築家で、本名はシャルル＝エドゥアール・ジャンヌレ＝グリという。フランク・ロイド・ライト、ミース・ファン・デル・ローエと共に「近代建築の三大巨匠」として位置づけられている。

1887年10月6日、ル・コルビュジエ（本名シャルル・エドゥアール・ジャンヌレ）はスイスの山あいの小都市ラ・ショー＝ド＝フォンで生まれました。スイスで活動した後、1917年にパリに出て、キュビズム（純粋主義）の画家として活動しながら、35歳で従兄弟のピエールと共同で建築事務所を設立します。1920年代には「新しい建築の5つの要点」を提唱し、「サヴォワ邸」に代表されるような、明るく清潔で機能的な住空間を創造しました。1930年代には「現代建築国際会議（CIAM）」の主唱者として世界の建築をリードし、いくつもの都市計画案を提示しています。第2次世界大戦後になると、独自の尺度「モデュロール」を発表し、この尺度を用いた集合住宅「ユニテ・ダビタシオン」や、「ロンシャンの礼拝堂」などの宗教建築、インドでの都市計画と大型公共建築などを手掛けました。

Villa Savoye

サヴォア邸

20世紀の住宅の最高作品の一つであり、フランスの歴史的建築物に指定されている。1964年、アンドレ・マルロー文化大臣が「サヴォア邸」を民間建築モノユメントに指定し、歴史遺産とした。このサヴォワ邸は、1929年にル・コルビュジェが表明した「ヒロナイ」、「屋上庭園」、「自由な設計」、「自由な平面」、そして、「横長の連続窓」という近代建築における5つの原則を探索・実現化した住宅建築である。



平面の中央には緩やかなスロープが設けられ、一階と二階を連続的に繋いでシークエンスを形成している。もとは別荘としての一般住宅であった。



リビングは、白とサーモン・ピンクに彩られたこの長方形の空間は、正面に屋上庭園を一望出来る大きなガラス窓、他方には、底辺と平行に施された連続的な長方形の窓々の効力により、外からの柔らかな陽光で満ち足りている。



無駄な装飾の無い室内には、ル・コルビュジェが創作した機能的な椅子「安楽椅子（Chaise Longue）」や、「自由に動く背を持つ椅子（Sling Chair）」などが置かれており、見学者は自由にそれらに腰を落ち着け、ゆったりとした気分で目の前の庭園を楽しむ事が出来る。

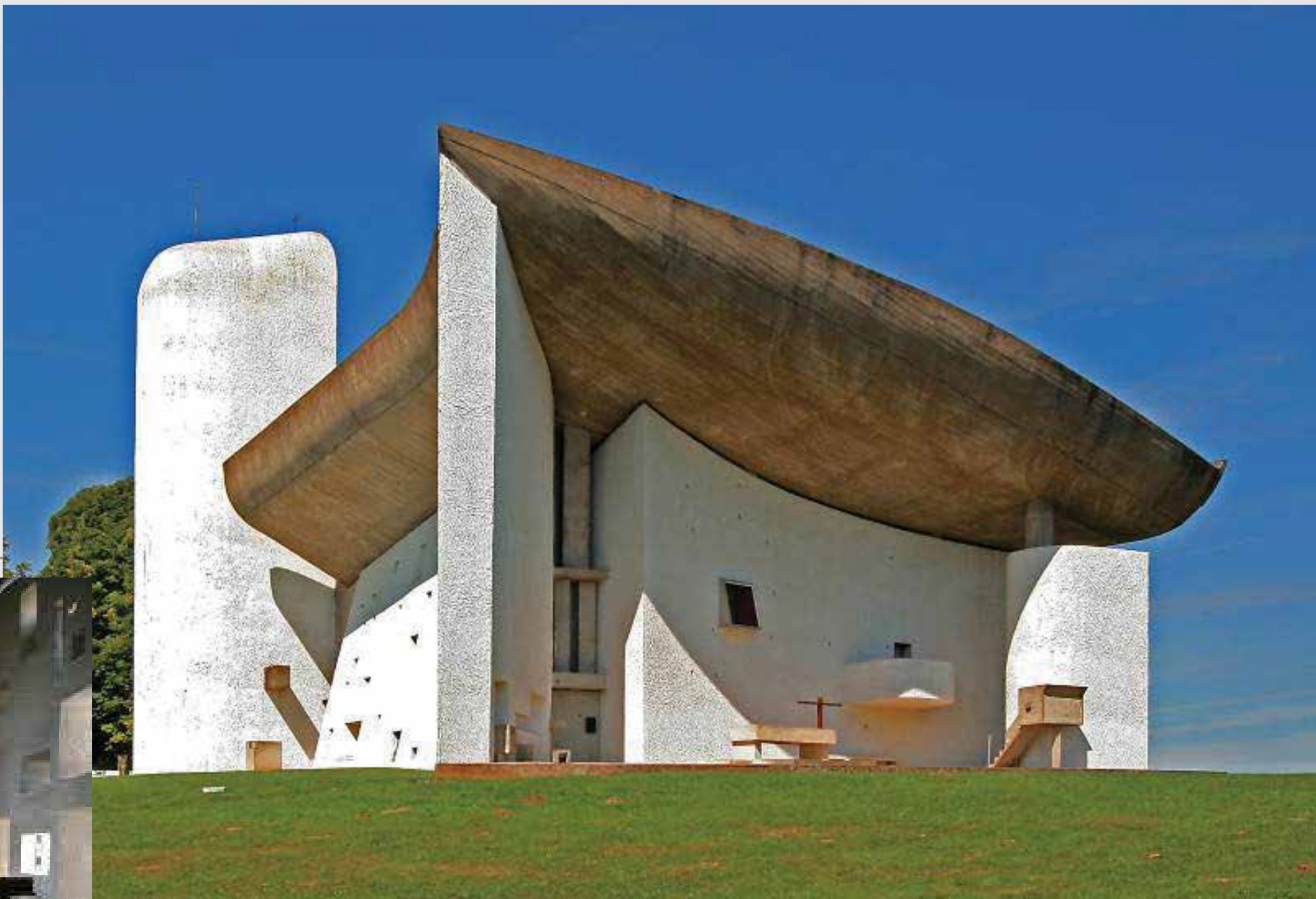


屋上庭園（Jardin Suspendu）に出てみよう。二天井となる部分がないと、こんなに開放的な気分になるものなのだ。と改めて感じる。この庭園こそが、邸宅内に光をもたらしていると言えるよ。

Chapel of Longchamp

ロンシャンの礼拝堂

フランス東部にある「ロンシャンの礼拝堂」は、ル・コルビュジエ最高傑作の一つとして世界的に名高い。ロンシャンの礼拝堂は正式名称を「ノートル・ダム・デュ・オー・礼拝堂」(Chapelle Notre-Dame du Haut)と言う。日本では「ロンシャンの教会」と呼ばれることも多いが、正確を期するなら教会(Eglise)ではなく礼拝堂(Chapelle)とよむ。



ロンシャンの礼拝堂は1955年、スイス生まれの世界的建築家ル・コルビュジエの手で竣工した。もともとこの地には中世以来の礼拝堂が存在したが、第二次大戦中にドイツの空襲により消失。戦後、礼拝堂再建のデザイナーとしてル・コルビュジエに白羽の矢が立った。飛行機の翼をイメージしたシェル構造の屋根と白く輝く厚い壁が特徴の彫刻のような建物。

27度のシェル構造からなる独特の形状をしたこの礼拝堂は、ル・コルビュジエ後期の傑作として世界的に名高い。巨大な南面の壁に穿たれた小さな開口部には、さまざまな原色ステンドグラスが奥深く嵌め込まれ、そこから差し込む外光の拡散(チンダル現象)によって、礼拝堂内部に極めて神秘的な光の空間が出現する。内部の壁に反射する光は柔らかい。採光塔の上側部から補われる反射外光、そして諸所に配された開口部の効果でチャペル内部は外部と隔絶する程には暗くなく、祈りのための空間として程良い明るさとなっている。



The National Museum of Western Art 国立西洋美術館

1956年に開館し、緑色の外壁は、近付いてみると、緑色の小石を全面に貼り付けたものであることがわかる。ただし、現在の外壁は建設当時のオリジナルではなく、後に改修したものである。建物の平面は正方形で、各辺に1本ずつのコンクリート打ち放しの円柱が立つ。これらの円柱は、2階では壁から離れて立つ独立柱となっている。



1階部分はピロティ（高床）構造となっていて、1階の大部分が室内に取り込まれている。



1階から2階へは、彫刻作品を眺めながら上れるように、階段ではなく、傾斜のゆるい斜路が設けられている。



1階中央部分は、屋上の明かり取り窓まで吹き抜けとなったホールで、ル・コルビュジエによって「16世紀ホール」と命名され、現在はロダンの彫刻の展示場となっている。

2階は、中央の吹き抜けのホールを囲む回廊状の展示室になっている。これは、ル・コルビュジエの「無限成長建築」というコンセプトに基づくもので、巻員が成長するように、将来拡張が必要となった際には外側へ外側へと建物を継ぎ足していける構造になっている。

